第1004号　　第三種郵便物認可　　みいけ　　（毎月二回1日、16日）　　昭和50年1月16日（木）（六）

椎葉村の主婦会の皆さんにとり囲まれて撮つたよろこびの久保さん。そこは鉄道沿線からはるか遠くはいつた、山の奥の山間でしたが、ここにも闘いをもとめる人間の生活がありました。

椎葉にも三池の灯が……

黒木倫子さんから久保前主婦会長へ

その後お変りなく、あわただしいインフレの日々をお過しの事と存じます。

先だっては、遠いところをはるばるこの椎葉までおいでいただき本当に、有難うございました。

三池から移した小さな灯を、私なりにどうにかして燃えあがらせようと努力し、今どうにか灯がチョロチョロとあがりはじめた椎葉の主婦会です。

久保会長の手で、三池の闘いの火を、いつかは椎葉にも移していただきたいといつも念願しておりました。ですから私にとって、涙が出て仕方のない定期大会でした。

会員同志で力を合わせ、頑張ってもらいたいと思いますし、私も微力ながら、共に闘いの灯をもやしていくつもりです。

再び三池の人と椎葉で相まみえる日を、楽しみにしております。

ご主人様にも、よろしくお伝え下さいませ。

記念のスナップができましたので、お届けします。

×

黒木さんのお住まいは「宮崎県東臼杵郡椎葉村」です。

忘年会だよ 全員集合!!

若葉分会　猿渡はぎえ

これは、去年の師走の話。

十二月も中旬近くになると、いずこでも金の有る無しに限らず、忘年会の声が聞かれる。

わが家の家族うちそろっての忘年会のひとときを書きますが、わあーいいな、なんて思わないで、私の話を最後まで聞いて下さい。

十二月七日は、娘の働いている会社が賞与の支給日であった。

しかし四月に私の母が亡くなりつづいて姉弟四人が交通事故にあい、一命は助かったものの四人とも入院するはめになった。だからこの娘は、私の妹の子どもの通学、通園のため一カ月半、会社に事情を話して、事故欠勤の許しを得て休んだ。

それで今期の支給額についても一応、自分の手にはこのくらいならばはいるだろう、と計算して納得し、もし思っていたより多い額ならば、そのときはニッコリするだけと、娘は一人で思っていたそうな。

しかし世相一般、今年の賞与支給については不況を理由に、社内預金や、あるいは分割払いの状態で、娘の会社とてこれにもれず、支給額の三分の二は社内預金で、残りの三分の一が現金として本人に渡される。

娘は自分で働いて得た金、とくに賞与で、家族そろって忘年会をしたいと、ずっと思っていたそうだ。

自分の父がガス患者になり、傷病手当を受けているようでは、忘年会を食堂かレストランで……と夢に思っていたとか。

私は、賞与一日寝かせを提唱したけれども、計算して使えば同じことだと主張した娘に私が負けて娘の意に添うことにした。

この頃はめったに帰宅しない（現在白鳩診療所入院中。九・二八坑内被災CO患者）夫も、その日は具合いがよかったのか帰ってきた。

忘年会に参加するのは、私ども親子三人。妹らが親子四人で計七人というメンバーだった。

夕方の五時には、六人は仕度ができて、いわゆる大漁旗を立てて帰ってくる娘を待っばかりとなった。

中小企業が賞与を支給する日は必ず社長が、創立以来辛苦を重ねて今日の繁栄があり、皆さんに賞与をお渡しできるのだから、ありがたく思うように、というふうな説教があって、やっとこさ各自に渡されるそうだが、「無駄使いしないように」？と解釈しなさい、と私はいった。

三池炭鉱だってこの企業と同じことで、日ごろ一生懸命に働くのだから、盆・暮れがくることは前もってわかっているから、スパッときれいに渡すべきものなのに、荒尾市営バスに乗って、駅前で西鉄バスに乗り替えた。

大牟田駅前で降車する乗客を見ていた夫は、

「まだ遠かね？」

「この次降りますよ」と、私。

夫、

「あーあ、トイレに行きたか」

私、

「そんなら降りましょうか。この次で降りるから、次で待ってよ」と娘に財布を渡して、私も夫のうしろから降りた。

この頃はめったに帰宅しない（現在白鳩診療所入院中。九・二八坑内被災CO患者）夫も、その日は具合いがよかったのか帰ってきた。

忘年会に参加するのは、私ども親子三人。妹らが親子四人で計七人というメンバーだった。

夕方の五時には、六人は仕度ができて、いわゆる大漁旗を立てて帰ってくる娘を待っばかりとなった。

中小企業が賞与を支給する日は必ず社長が、創立以来辛苦を重ねて今日の繁栄があり、皆さんに賞与をお渡しできるのだから、ありがたく思うように、というふうな説教があって、やっとこさ各自に渡されるそうだが、「無駄使いしないように」？と解釈しなさい、と私はいった。

三池炭鉱だってこの企業と同じことで、日ごろ一生懸命に働くのだから、盆・暮れがくることは前もってわかっているから、スパッときれいに渡すべきものなのに、荒尾市営バスに乗って、駅前で西鉄バスに乗り替えた。

大牟田駅前で降車する乗客を見ていた夫は、

「まだ遠かね？」

「この次降りますよ」と、私。

夫、

「あーあ、トイレに行きたか」

私、

「そんなら降りましょうか。この次で降りるから、次で待ってよ」と娘に財布を渡して、私も夫のうしろから降りた。

駅の改札口をでてこられたばかりのように見受けた。

小崎さんは、薄暗がりの思いがけない場所に、男もののコートを手にしながら立っている私を見られて、不審だったのか声をかけられた。

私が、夫以外のボーイフレンドでも待っていれば、身心ともにおだやかならず、弁解これつとめ、冷や汗を書いたかもしれないが、病める夫をもちながらも、母親とも名のつく妻にそんなやましいことのできるはずがなく、またこの顔で、この気性でそれができるはずもなく、私——

「あ、今晩は。今夜は、家族そろっての忘年会をしようということになり、でてきましたが、おやじさんがトイレに行きたいというものですから、私たち二人だけ降りて、ほかの家族は次のバス停で待っています」

小崎さん、

「ほお。そらー、よかですな」

私、

「今日は、どちら？」

「取材に行ってきました」

「それは、それは。お疲れさまでした」

小崎さんとはそういって別れたが、ガス患者を夫に持つ妻、家族のみんなは、似たり寄ったりの悩みをもつことだろう。

家をでて、一時間くらいでもう会員がどのような受けとめ方をしたか、聞いてみますと、三池の灯は一人ひとりの胸にともったようです。

息のながい、そして本当にお父さんと共に、家族ぐるみで闘えるお母さんであってもらいたいものです。

用便がこらえられないさまになってしまった夫。

夫がトイレを済ませて出てきたところで、やっと全員そろったものの、席を予約していた店は、三十分くらい遅れたことを理由に、「もうほかの客をいれたから」とすげない言葉。

「電話をかけておいたでしょうが」という娘をなだめ、私たちはその店を出た。「三十分も待てない、誠意のない店など二度とこないから、未練がましいことはいわないことだ。店の奴らが、よけいのぼせるよ」と。

ほかに店をさがして席についているうち、やっと注文のものが出てきた。

ちょっとメニューをお知らせしましょうか。

お子様二人には〝お子さまランチ〟。一人三百円。夫は〝和風ランチ〟。四百五十円。娘と私は〝Aランチ〟。六百円。弟夫妻は〝Aランチ〟に〝和風ランチ〟。ほかにビール一本と、子ども二人に飲みもの。

ふたくちみくち取り込んで、やっと人心地になったものだった。

済むとそのまま家に帰り、暖をとり、やっとくつろいだが、「うまかった」「よかった」「たのしかった」で、その日は終った。

さあ、次の忘年会をめざしてまた働こう。頑張らなくちゃ。

中国訪問記

政治局　酒井善為

安定している〝物価〟

おどろく無限のエネルギー

ハルピンの街に立つ筆者

この原稿を書くとき家の者に「今牛肉はいくらくらいかな」と聞いたら、「あんまり高いので近ごろは買わん」、ということでした。マーケットに問い合わせてみると、スキヤキ用で百グラム二百円から二百五十円、とのことでありました。

今私の手許に、昭和三十二年の訪中記録があります。北京東安市場付近の店頭にて価格を見るに、牛肉一斤七十六銭也で米一斤十五銭也とあり、労働者一人当りの賃金平均は六十円也、と記載してあります。

去年の十月十日より十一月の始めまで、皆さんのお陰で戦後三回目の訪中を致しました。貧乏人の悲しき性と申しましょうか、目がすぐ物価に移ります。

ホテルの近所にあるマーケットに行ってみましたところ、牛肉一斤七十五銭也、と表示してありました。

これを日本流に計算しますと一キログラム二百二十五円ということになります。

タラメなゼイタクさえ言わなければ、衣食住ともに不自由はないのです。

背広を着て、有るような顔をして歩いていても、肉なんぞ高いから近ごろ買うたことはないと台所から苦情が出るような、イビツな生活はありません。

今度の訪問で私が主要課題としたのは、幹部の具体的な行動に関する研究でした。そのために幹部学校にも臨時入校させてもらいましたし、立入った話しをしたり、聞いたりもしましたが、その一例について紹介したいと思います。

最初行ったころは解放間もないころでありましたから住宅、労働環境などもバラツキがありましたが、だんだん改善されて今では北京市内の労働者住宅にはスチームも入っており、家賃は月五円くらい。夫婦二人の家庭で八十円もあれば好い、と住宅街の主婦が言っていました。

物価は完全に安定している。労働環境は保障されている。デモ、三門主義（家の門、学校の門、会社の門を要領よく突破すれば幹部となる）に陥入ったりするのは、根本的な誤りである。

そのような思想は、プロ文革で排除をした。しかし人間には常に権力、金力に対する欲望と怠ける本能があるので、そのためにも常に自己をきたえる必要がある。

自分をきたえるのは事務所ではなく現場であり、最も厳しい労働現場である。そのために私たちは最低、年に三百日以上は現場で働いている。

組合員の苦情処理はどうするか。それは現場で聞いて処理した方が、頭の中で考えるより正しく処理できる。

会議は夜すればよい。大衆に依拠した指導というものは、大衆の中で実践してこそできるものであって、人民大衆と関係のない、革命の発展とかかわりのない会議というものは無意味である。

議論をもて遊んだり、会議のために労働をサボルぐせがつくと、ぞこいらから修正主義の悪い風習がしのびこんでくる。

地方の幹部（大地評の事務局長程度ではないかと思う）でも二百日以上は働いている。県の幹部（県評の専従？）でも、最低百日くらいは現場にでている。

労働者、農民に学び、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想を活学実践する場所こそ幹部学校で、厳しさは現場幹部よりもっと要求される。しかし私たちは、中国革命の発展と世界革命のために頑張る。

このような幹部の姿勢が大衆に伝わり、無限のエネルギーとなって今日の中国を育てたのではないでしょうか。